



川北、三本松、三村らは、オフィス街でのコミュニティ活動がその地域の活性化にどのような成果をもたらすのか、その結果を報告した。大学と地域および研究所が連携して実際に取り組み、居住地ではない勤労の場所におけるコミュニティ活動の効果に注目し、地域活性化の多様性を示唆した。

飯郷、浜田、阿部らは、栃木県内で取り組む、温泉トラフグ事業に関わる生物研究からの視点による報告を行った。地域の特性を活かし、大学と企業が連携して事業化した。また、トラフグを陸上養殖する際に課題となる「菌切り」作業を簡便にするために、遺伝子レベルからアプローチすることで研究を地域活性化に繋げた。

石原、武田、飯郷らは、栃木県内で多く生産されるアユに注目し、観光資源である釣りを活性化する方法について大学と公設研究所と連携し、遺伝子レベルからアプローチした。アユの友釣りは、なわばり行動と攻撃行動を利用したものであるが、攻撃性の強い個体を選抜育種し、「釣れやすいアユ」を放流することで、地域経済に貢献するというものである。トラフグ、アユに関わる両取り組みは、研究者が自らの専門分野について地域経済の活性化までデザインして取り組んだ事例である。

嵯峨、福田、泉らは、大学、地域、公設研究所、民間企業が連携し、地域活性化に貢献するサーモンの養殖事業への取り組み事例を報告した。青森県の水産業は、生産量が多いのにも関わらず生産額は少ない。水産物の価値を高める試みとして世界的に需要が高いサーモンに注目し、アジアへの供給基地としての機能を担うべく、海外を視野に入れた実証事業に取り組んでいる。

高岸、坂井、川口、鈴木らは、農研機構が取り組む新技術や新品種の普及活動について報告した。消費者や実需者が新たな品種を受け入れるには、時間を要することが多く、結果として、優れた特徴を有していても農家は手を出しにくい。そのため、原材料として使用するユーザーのニーズを調査し、農家と生産者等を結ぶコーディネート等を独自に展開した。本事例では、新しいものを積極的取り入れ、また多品種少量生産を行うことが多い和菓子業界に着目し、実用化に結実した。研究所や大学の新たな産学連携に関わるアプローチを示した。

---

産学官連携プロジェクト5

座長 永富太一／香川大学

6月16日(金)第2日目B会場(14:00~15:00)

本セッションは4件の発表予定であったが、高柴（作新学院大学）、栗城

(作新学院大学)が発表を辞退したため、2件の発表が行われた。

福重ら(阪南大学)は、秋田県仙北市における地方創生の取り組みについての調査報告として、地方創生特区に指定され、医療ツーリズムによるソーシャルビジネスについて報告がなされた。ある企業における事例では、冬期に宿泊客が減少する等の課題に対して温泉療法による通年での事業サービスを展開し、成果を挙げている最中に、東日本大震災や雪崩事故等により事業継続が困難な状況に陥るなど、調査期間中に目まぐるしく変化する経営のリアルな状況を報告として纏めた。

服部(島根大学)らは、発表者の前職である四国大学での活動報告として、徳島県で毎年開催されている「四国酒まつり」での地域活性化の取り組み事例について発表を行った。地域の大学としてまつりへの参加協力と、まつりの来場者に対するアンケート調査を行い、テキストマイニングを用いた分析を行った。まつりの魅力や課題を定性的、定量的に把握し、さらなる魅力を向上するための指標として提示や、大学として協力する際の新たな課題を抽出したこと等が報告された。

どちらの発表も地域の活性化に取り組む事例として、客観的な視点から把握、分析されており、とても興味深い内容であった。

---

以上